

て、居り、王朝以後、殊に新王國以降は寧ろ、簡單すぎないかと思はれる程である。この點は在來の古代埃及をとくものと餘程差異がある。素より書名が埃及の生成であり、その崩壞過程については省略せられたる點の多いことと解せられる。

ランケ(Ranke)は素より、日本流に數へて八十三歳にて近代民主政治(Modern Democracies)を著述したブライス(Bryce)の高齡尙、健筆であつたことを考へると共に、茲に本書の著者の健康を祝して、江湖に推擧する拙い紹介の筆を擱きたい。(岡島)

ルネサンスのヒューマンストの見解

ワレス・K・フアーガソン

Humanist Views of the Renaissance: Wallace K.

Ferguson (American Historical Review Vol. XLV.

No. 1.)

ブルクハルトの「伊太利ルネサンスの文化」をめぐつて若起された所謂ルネサンスの概念論争は最近の史學界に於て極めて絢爛たる場面を展開せしめた問題であるが、現在に於てはこの論争を、その頂點がルネサンス時代にある近代史學史の一部として見得るに至つたと思ふ。就中、ブルクハルトに對する批判中最も重要な部分は、彼の藝術に對する愛着から來る非歴史的な偏見の結果、中世とルネサンスの連続性を無視せんとした事に對するものであり、普通それはルネサンス人自身の考へからの傳統を受繼ぐものとされるが故に我々はこの問題を徹底的に追求するためには

ルネサンス人自身のルネサンス觀に迄遡らねばならない。著者の主たる目的はかかる見地に立つ研究であるかの様に思れる。氏はこの論文に於て Burdach や Borinski の如き單なる一片の「復興」「再生」の語にルネサンス精神を認めたり、再生の理念の哲學的表現を歴史的理念よりも重んじて追求して行つた態度に反對し「伊太利ヒューマンストの作品中の「再生」もしくは「中世」の問題に關する一貫した、全體的な議論」(p. 3)の考察を試みてゐる。論文の構成は政治に關するものと文化に關するものとの二部に分たれる。

一

ヒューマンストは近代史學の開拓者である。種々な點で批判はあらうが彼等の歴史敘述の中で第一流のものは廣い觀點、論理整然たる組織、批判的精神等を持つる點に於て中世の素朴な年代記の水準を遙に抜くものなる事は否定出來ない。しかも彼等は歴史を單なる神の攝理の顯現とは見ずに人間の動因により動かされた人間の記録と考へたのである。それは多分人文主義者が教養ある市民として新興國家の實際政治と外交とを代表した事によるのであらう。

中世に於てはローマ帝國はダニエル書の第四帝國であるとされ帝國永続は中世人の信念であつた。したがつてそこにはローマの文化、帝國解體後の暗黒時代、文化の復興等の區別は認識され得ない。帝國の没落に氣付いたものもそれは世界が終滅へ近づく歴史の一般的衰微の徴候と考へた。ダンテの帝國觀もこの範圍を出

ない。新しき歴史叙述はヒューマニストが伊太利及びその諸分邦の特殊史へ關心を持つ様になつて開始される。しかもそれは長い停滞と緩慢な發展經過の後出現するのである。

Giovanni Villani が新史學の第一步を印する。彼の Cronica はすべての現象を神の意志に歸すが、六時代とか四帝國とかは思考されず、後章に於ては、歴史を遊星の周期的出現によつて説明しようとする。かゝる歴史に於ても我々は彼が帝國没落を野蠻人の侵入に歸した所を買はねばならない。次にベトラルカが出る。彼はローマ帝國はローマ市民の Virtus に支へられたものであり横做され得可きものではないとして歴史上の translatio imperii を不可能とした。この意味に於て彼は尙ある點に於ては古代共和國の政治的可能性と云ふが如き非歴史的信念の中に生きて居たと云へ、古代、中世、近世の三時代の差異を認め、後人を益したのである。

ルネサンスの伊太利人は古代ローマの中に國民的過去を見出し彼等の古代への熱狂は國民的感情により更に拍車づけられたと云ふ一般の見解はたしかに事實であるが、それはベトラルカとその後繼者に特にそうなのであつて十五世紀の一般ヒューマニストの愛國心は彼等の屬する地方國家に集中されて居つた。之等の都市國家はローマ帝國解體の後生れたため、歴史家は自國の歴史を帝國の没落から始めた事は特殊な意義を持つ。代表的なものは S. Bruni の Historiarum Florenti populi libri xii である。それは著しい共和的色彩を以て特色としヒューマニネの歴史的役割を正

しく評價し、「ローマ帝國の解體を救ひ難き破局とはせず、ヒューマニネ勃興のため必然的な前奏曲と見なした」(6)。尙帝國没落の原因を皇帝政治が市民の自由を奪つた事に由來する事を強調してある事は注目されねばならない、ブルニの中世觀を増強したものは F. Bronds: Historiarum ab inclinatione Romanorum imperii decades である。ブルニとは明かに系統を異にして、ピオンドはこの引用多く鈍重な歴史書に於て、ローマ帝國没落は四一二年の悲劇により始る事、その後の史書に缺けたる一千年間は伊太利各都市勃興の準備期である。何故ならば、ローマは餘りにも伊太利の富と力を獨占しそのため各都市の興隆を阻んでゐたがその支配權が停止した事は今迄、盛り上る力をおさへられてゐた各都市の生長を許す事になつたからであるとする。ピオンドもブルニと同じく都市の發達は自動的にして、その發達は深く中世にあると考へてゐるのである。勿論彼が中世と自己の時代との差異即ち中世を考へてゐた事は推論出來るのであるが。

以後著者は更に二大著の影響のあとをたどつて行く。しかしそれはもう紹介の要はないであらう。

二

ルネサンスの歴史書は文化的事象を全く無視せるため、ヒューマニネの文化史に對する觀念は種々なる材料から抽出して來なければならぬ。之等によつて考へるに文化史に於てもローマ没落は決定的な事件であり、それに暗黒時代、作家の時代に於ける偉大なる復興が認識される事等政治史の場合と變化はない。たゞ中

世無視の度が著しき事、暗黒時代が長く復興は急激であり、且何人の個人の天才に基くとされる事等の差異がある。こゝに於てルネサンスの眞の概念、古代文化とその死滅、突如たる復興の理念が生じて来るのである。しかし細部に於ては各人の認識に變化が當然認められる。ヴィラニはローマ没落を文化の没落としその責任者にキリスト教を數へ、復興の先驅者としてダンテ、チマブエを擧げた。ブルニは政治と同じく文化も共和制時代に最高に達し皇帝により破壊されて行く、文藝復興は都市の自由回復の後おそくペトルカを以て眞に始ると考へた。しかしヒューマニストの加様な觀察はピオンドの如く伊太利全體を意識したものは特別の例外として、郷市への愛國心などから文藝復興の擔當者を強ひて自國や自國民に歸さんとする傾向ある事は注意す可きである。又ヒューマニストは一般に歴史的觀察をなさず、中世との連続性の如きは思考されなかつた。美術家自身の美術復興に對する見解も如上のヒューマニストのそれと大差はない。然し十五世紀人は新運動を理解するには餘りにそれに近づきすぎてみたと云へる。従つて最初の完全な合理化された伊太利美術史が完成されたのはルネサンスが頂點をすぎたすこゝ後であつた。Yasuni の *Le Vie* それであり、この書に於て初めてチマブエ時代の美術復興が *rinascita* と考へられたのである。「中世美術とルネサンス美術の時代区分はこゝに初めて確定的な歴史的形體を得た」(p. 10) しかし彼とて中世美術を全く無視したのでなく十一世紀美術の進展等には注意してゐたが眞の復興の、しかも基礎附時代がチマブエ等の寫實主

義にあるとしたのであつた。

個性強きヒューマニストの見解を結論する事は困難である。強ひて述べるならば、ヒューマニストは古代中世復興の三時代を考へた事復興を伊太利のみに限定したとは云へる。但し復興開始期の設定等は一致せぬ、古代は模範としては考へられたが新文化が再生と考へられた様に見える暗示はすくない。ルネサンス人にとつても復興それは伊太利都市の作業であつたと考へねばならぬ。

以上約論したフアীগソンのこの小論は、議論が多少不徹底であり、史觀の紹介以上に出る事すくなく、著しく獨創的であると云ふ様な點は見られぬけれど、種々なる暗示に富み健實なる實證的研究であつて十五世紀伊太利人の歴史觀特に中世觀ルネサンス觀を知るに恰好のものと思れる。たゞ一言附加する事を許されたい。それはこの論文が美術史ではともかくヴァザリに迄及んだのにも拘らず、政治史方面では共和主義者の見解を叙することにまつた事である。彼等の思想からは政治と文化を個人に歸すと云ふルネサンス歴史の一傾向は考へられない。故に何等かの結論へ導かれるためには更にすくなくともマキアベリ、ギチヤルデイーニ等の民衆政治の否定者の見解追求を要するのではなからうか。

とあれ從來この方面の研究の比較的乏しかつた米國の史界にかゝる論文の出現は喜ぶ可き事である。今後の發展を期待しつつ、つたない紹介の筆を置きたい。(會田雄次)